

Title	J・ロビンソン マルクス再読
Sub Title	
Author	大熊, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.11 (1954. 11) ,p.1073(77)- 1074(78)
JaLC DOI	10.14991/001.19541101-0077
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19541101-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

對して不明確でなく行爲の選擇を規定するならば、そのときそれは歸納的行爲の一つの規則である。この定義に於て、結果

$E_1, E_2, \dots, E_n, \dots$ が必然的に確率的であるということは要求されない。Rは異つた可能な結果 $E_1, E_2, \dots, E_n, \dots$ をもつ若干の確率的實驗に關連する歸納的行爲の規則であるとしてしよう。そして $a_1, a_2, \dots, a_n, \dots$ はこの規則によつて規定された異つた行爲であるとしてしよう。規則Rの統計的決定函数は實驗の可能な結果と規則Rに從つてとられる行爲との間の對應をつくりあげる函数 $\phi(E)$ である。ある確率的試行の異つた結果の確率が知られず、その行爲の望ましき或は可能な行爲がこれらの確率に依存している時かかる試行Tに關して歸納的行爲の規則を採用する必要が起る。他の場合に於て考えられる特殊な行爲の望ましきは試行に結びついた一つではなくて數個の確率の値に依存するかもしれぬ。又この望ましきは確率それ自身によつてではなく、若干の順次に確率を決定してゆくパラメーターと呼ばれるある量

$\theta_1, \theta_2, \dots, \theta_n, \dots$ の値によつて決定されるであろう。どんな場合であらうと歸納的行爲の可能な規則の間の合理的選擇は試行Tの下にある確率の値の集合、例えば Ω 、或は特殊な問題に於て、可能或は許容されうると考えられるパラメーターの値の集合の定義を要求する。歸納的行爲の規則の選擇は集合 Ω がいかなる領域をもつているかに依存するであろう。確率的試行Tの下にある確率は若干のパラメーター

$\theta_1, \theta_2, \dots, \theta_n, \dots$ の値の組織、例えば θ 、によつて決定されるとしよう。與えられた場合に於て、できる限り考えられる所のすべての組織の集合は許容可能な假説 (admissible hypotheses) と呼ばれる。

變數Xの觀察値に從つて二つの可能な行爲の間の選擇を決定するところの歸納的行爲のあらゆる規則は統計的假説の檢定と呼ばれる。以上によつても本書が統計學を歸納的行爲の規則を定めるものであるとしその中心は假説檢定論にありとするものであることが知れよう。第一章序論、第二章確率、第三章發生學に於ける確率の問題、第四章確率變數と頻度分布、について第五章統計的假説檢定論入門として特に約百頁を費いやして詳細に書かれている。特に假説檢定の際問題となる、假説が眞であるにもかかわらずそれを棄却する確率即ち第一種の過誤を一定と定めた時、假説が偽であるにもかかわらずそれを受け入れる確率、即ち第二種の過誤を最小にするように、即ち假説が偽である時それを受け入れない確率 β 檢定力を最大にするような棄却域を求める問題で、そのような領域は存在しないのが普通であるが簡単な場合ならばそれを求めることができるわけである。その點についても本書はいちいち例をあげ詳細に説明し普通の統計書で抽象的に知つたことを具體的にこのような場合はこうなるのかとなつとくすることができるのである。

(佐藤 保)

J・ロビンソン『マルクス再讀』

Joan Robinson, On Re-Reading Marx.
Student's Bookshops Ltd., Cambridge.
1953. pp. 23.

扉に「マルクシズムはマルクス主義者のアヘンである」という文字を打出した本書は、ブルジョア經濟學者にもマルクス經濟學者にもフェアなマルクスの「讀直し」をすすめたものであり、平俗な文章の間を縫うその立場は、ケムブリッジ學派のマ

書評及び紹介

各組織 θ は許容可能な單純假説或は許容可能なパラメーターポイントのいづれかで呼ばれる。さてRはある確率的試行Tに關する歸納的行爲の規則とし、 $a_1, a_2, \dots, a_n, \dots$ はRによつて規定される異つた行爲であるとしてしよう。更に Ω は許容可能な假説 θ の集合であるとしてしよう。集合 Ω の各々の特殊な θ に對して、規則Rの應用が行爲 $a_n, n=1, 2, \dots$ を導くであろう所の確率 $P(a_n, \theta)$ を考えよう。各々の確率 $P(a_n, \theta)$ はそのときすべての集合 Ω に涉つて定義された θ の函数である。規則Rが特殊な行爲 $a_1, a_2, \dots, a_n, \dots$ を導くところの確率を示す函数の組織 $P(a_1, \theta), P(a_2, \theta), \dots, P(a_n, \theta), \dots$ は規則Rの performance characteristic と呼ばれる。歸納的行爲のいくつかの可能な規則の間の合理的選擇はこれらの performance characteristics の基礎の上にも可能である。數理統計學は確率論の一部門である。それは確率的試行に基礎を置く歸納的行爲の規則の performance characteristics に關する問題を取扱うものである。例えば與えられた歸納的行爲の規則に對してその performance characteristics を決定すること、或はより重要に思はれる與えられた確率的試行と許容可能な假説の集合 Ω と考えられる可能な行爲 $a_1, a_2, \dots, a_n, \dots$ に對して performance characteristics のあるきめられた性質 (最適性質) をもつ歸納的行爲の規則を決定することがそれである。後者が統計學の一般的な問題であるが通常、行爲は二種類に限られてゐる。即ち觀察によつて決定される標本點 θ が特殊な點の範疇に落ちる時我々は行爲Aをとり、すべての他の場合には行爲Bをとることを規定する何等かの規則Rを考えればこれは統計的假説の檢定である。換言すれば、頻度函数 $P_x(\theta)$ が未知であり、そして考えられる二つの行爲のみがあり、そのいづれが望ましいかは $P_x(\theta)$ の性質に依存する時、そのとき確率

「マルクスの「讀直し」にあるといえよう。わずか二十數頁の小冊子は三つの短文から成る。難しい學理は無く、比喩と諧謔に充ちた、易しい説得であり、近年ジョン・ロビンソン一連の長期理論の「まくら」と見てよからう。

三種の鳥賊がいる。一つは赤いすみを吐き(マルクス)、一つは青(マーシャル)、一つは赤紫色(ケインズ)のすみを吐く。この鳥賊は全部捕えて水から揚げる。すみは海中に失われ、砂上の鳥賊はどれもみなまづ白で硬ばつた動物ではないか。

三匹の鳥賊を別々に語ることは甚だ困難である。マーシャルの短期理論からケインズが出発したとすれば、マルクスはマーシャルの長期理論の意圖と同じ意圖をそれより前に一そう理論的に展開したものに外ならない。マーシャルが仕送けた短期均衡論に對應する長期理論は、ケインズ學派のハロッドの「保證された成長率」に良く仕送げられたかに見えるが、彼の理論ははからずも資本論第二部の筋書に等しかつたのである。このエッセイではむしろケインズは中間的存在であり、時に snob と呼ばれ、ケインズ革命の中に假説と歸納の結びつかない非理論的理論が指摘されたりもする。

マーシャルとマルクスとは共にリカードの有能な使徒であつた。リカードの時代は地主の經濟上の地位が問題の中心となり得た時代であつたが、今やそれに資本家がとつて代つた。マルクスはリカードの論議を次のように轉換する、資本家は地主に非常によく似ている。マーシャルは、地主は資本家に非常によく似ている、という風に展開する。英國史の道角を廻つて全く同じ製作の自轉車が、片方は左へ片方は右へ走つて行く。

ただし、マーシャルは價值論を小問題に切下げてしまつた。リカードにとつて價值論は總生産物が賃金、地代、利潤總額にいかにか分配されるかを分析するといふ、大問題であつた。マーシ

アルの價值論とは、卵はなぜ一杯の茶より高いか、である。これは小さな問題だが甚だ複雑であり、爾來五十年間、マーシャルの弟子は曾つての大問題にとり組むいとまなく、一杯の茶の價格の理論の精密化に終始していた。

も一度大問題を取り上げたのはケインズである。再び總體として生産高が對象となり、價格水準は體系の複雑化をもたらすが、メイン・イベントではなくなつた。貨幣價格の代りに、「一労働時間」が價值單位となつた。今日われわれの在る所は正にここである、すなわち、リカードの大問題をマルクスの價值單位で語ることに。

マルクシストは常にこの大問題を語り、語らねばならぬ。しかし、彼らはそれをヘーゲル語でしか語ることができず、英語しか知らぬ英國人には全く役立たない。第三エッセイ「ケインジアンからマルクシストへの公開状」で、このケインジアンは決然と曰く、私はマルクスを私の體內にもち、貴君はマルクスを貴君の口先にもつ、と。これがブルジョア經濟學者の痰阿と見えるか、捨てぜりふと聞えるかは別として、ケムブリッジ學派とマルクス學派との交渉を V.P.I. に描破している點、一讀の價值があろう。

第一、第二エッセイの表題はそれぞれ、「君は信じるだろうか」「ケムブリッジ經濟學者のオクスフォードでの講義」である。第二エッセイの短期供給價格の説明は有意義である。

(大熊 一郎)

第四十七卷 第十二號 目次

聖トーマス・の財産論について

平井 新

産業生産性の計測………尾崎 巖

製紙産業への適用——

資 料

イギリス労働黨の國有化理論………飯田 鼎

國有化政策の背後にひそむもの——

宗門改帳より壬申戸籍へ(一)………速水 融

——維新期の人口調査とその一例——

書評及び紹介

經濟學關係文献目錄

經濟學關係文献目錄

(昭和二十九年七月刊)

理論・學說史・經濟思想

- * 經濟學の古典と近代 平瀬巳之吉著 A 5 四六四頁 五〇〇圓 時潮社
- * 經濟學原理 下 マルサス著 依光良馨譯 A 6 三四二頁 五〇〇圓 春秋社
- * 經濟政策の解明 石村善兵衛著 A 5 二四二頁 三二〇圓 金文社
- * 利子つき資本の理論 — マルクス信用理論の研究 — 飯田繁著 A 5 四八九頁 七五〇圓 日本評論新社
- * 資本論解説(國民文庫) レオンチエフ、ドツプ著 高木幸二郎譯 A 6 二四二頁 一〇〇圓 國民文庫社
- * 社會科學入門(岩波新書) 高島善哉著 B 40 二二〇頁 一〇〇圓 岩波書店
- * 經濟思想發展史 1 經濟學の黎明 スピーゲル編 越村信三郎、長洲一二監譯 B 6 二〇四頁 二三〇圓 東洋經濟新報社
- * 經濟思想發展史 2 古典學派 スピーゲル編 越村信三郎、長洲一二監譯 B 6 二六四頁 二七〇圓 東洋經濟新報社
- * 純粹經濟學 増補版(岩波全書) 中伊知郎著 B 6 小 三一頁 二六〇圓 岩波書店
- * 通論經濟學 中山伊知郎著 A 5 二〇八頁 二八〇圓 如水書房

統計・數學

- * 經濟動態分析の基礎 日比野勇夫著 A 5 三七四頁 六〇〇圓 同文館
- * 經濟研究者のための數學解析 下 アレン著 高木秀文譯 B 6 三七六頁 四五〇圓 有斐閣

財務・金融・保險・證券

- * 保險學總論 改訂版 白杉三郎著 A 5 二六四頁 三五〇圓 千倉書房
- * 財政思想史 古典編 花戸龍藏著 A 5 一五八頁 二三〇圓 千倉書房
- * 財政の基礎的理論 上 大淵利男著 A 5 四六八頁 六五〇圓 三和書房
- * 財政學 延兼數之助著 A 5 一九二頁 二八〇圓 三和書房
- * 金融(らいぶらりしりいず) 高垣寅次郎編 B 6 二五二頁 二三〇圓 有斐閣

商工業・經營・會計

- * 經營管理論 笛木正治著 A 5 二〇〇頁 三二〇圓 評論社
- * 會計學研究—アメリカ企業會計原則の研究— 木村和三郎著 七九 (一〇七五)